

氏名（本籍）	わか なべ みどり 若 鍋 翠（神奈川県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 109 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 24 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	阿弥陀来迎図と檀王法林寺所蔵「熊野権現影向図」の図様と描法の関係について
論文審査委員	主 査 教 授 藁 谷 実 副 査 准教授 城 市 真理子 副 査 准教授 石 川 知 彦

## 論文内容の要旨

本稿は、広島市立大学所蔵「阿弥陀来迎図」（以下、市大本）の推定復元模写を通して、阿弥陀来迎図と「熊野権現影向図」（京都・檀王法林寺所蔵、以下、檀王法林寺本）の図様と描法の関係について論じるものである。

市大本は十四世紀に制作された来迎図であるが、付属資料が一切残されておらず、作者や来歴は不明である。画面中央に来迎印を結んだ阿弥陀如来を一体描き、脇侍・眷属を描かない独尊形式を採る。画幅は著しく損傷しているが、よく見るとそこには精緻な截金文様、強靱な鉄線描に裏打ちされた、高度な工芸技術を垣間見ることができる。これに対し檀王法林寺本は、国の重要文化財に指定されながらもその専論は少なく、詳細な研究が為されていない。その画面構成と背景にある思想は極めて珍しいもので、十四世紀の神仏習合思想、仏教芸術のあり方を示す特異な作品である。

この二作品の制作時期である十四世紀、すなわち南北朝時代の阿弥陀来迎図は、鎌倉時代のそれと比較すると美術史上でも取り上げられることが少なく、研究も捗っていない。ならびに、この時期の仏画の詳細な描法の検討は、美術史側からも、絵画制作を行う側からも為されなかったように思う。

そこで本稿では、市大本の詳細な調査を行い、その図様と描法を同時期の作品と比較検討、その結果を参考としながら欠損部位を復元し、推定復元模写を完成させる。市大本は十四世紀阿弥陀来迎図の典型作であるため、彩色や截金を実践的に行うことにより、十四世紀阿弥陀来迎図の技法をよりの確に論述することができると考える。さらにその成果を基に、檀王法林寺本の描法や成立、制作背景について検討する。

檀王法林寺本は、下半身を湧雲<sup>ゆううん</sup>に覆われた阿弥陀如来が一体描かれた垂迹<sup>すいじやく</sup>画である。阿弥陀如来の描法は市大本同様十四世紀の定型を示すが、画面上部には臨濟宗聖一派<sup>しやういち</sup>の僧南山士雲<sup>なんざんしうん</sup>(1254-1335)の画賛が付され、さらには宝暦十年(1760)に由緒書<sup>ゆいしょがき</sup>も奉納されるなど、同時期の来迎図と比較すると非常に特殊な背景をもつ。しかし、こういった史料に恵まれながらも、檀王法林寺本の成立については不明な点が多い。また、画中に参詣者や鳥居、松や灌木を描き込む構成には、熊野近隣の春日の垂迹画、すなわち春日曼荼羅の存在が看取されるなど、制作背景についても論ずる点の多い作品である。

以上を踏まえ本稿では、文章を大きく二部構成とし、第一部、第二部とそれぞれの作品について論じることとする。

第一部では、市大本について述べる。市大本の描法と史的位置を明らかにするため、平安から南北朝時代までの阿弥陀来迎図の図様と描法を詳細に比較検討し、その研究成果を推定復元模写という形で提示する。手法としては、まず蛍光X線・赤外線撮影による調査を行い、使用された顔料や欠損部位を明らかにし、作品の現状と表現方法を把握する。次に、同時期の遺例と比較しながら、市大本の欠損部位を復元する。これら研究結果を基に、推定復元模写の下図制作から絹上げ、彩色に至るまでの実践的行程を詳述する。

第二部では、第一部の研究結果を参考としながら檀王法林寺本について述べる。実際に寄託先である京都国立博物館にて調査を行い、檀王法林寺本の構成や図様の詳細部分を市大本その他十四世紀の遺例と比較しながら具体的な描法を検討し、史的位置付けを試みる。次に、熊野在来の仏像や神像、曼荼羅、縁起絵巻等の作品を列挙し、熊野において阿弥陀如来がどのように造像されてきたのかを述べ、檀王法林寺本の特異性を検討する。また、檀王法林寺本の成立背景にわが国の伝統的他界観が根付いていることを指摘し、その他界観が従来の阿弥陀来迎図、山越阿弥陀図における山水描写と雲の表現の中に看取されることを指摘する。

ならびに、宝暦十年(1760)奉納の由緒書を参考とし、檀王法林寺本が熊野信仰と関わりの深い名取老女<sup>なとり</sup>の古縁起に基づいて描かれたこと、画幅制作の願主たりうる尼の思想やその宗派に到るまでを検討する。加えて、檀王法林寺本の賛者とされる南山士雲の活動について概観し、禅宗と神祇の関係及び熊野における禅宗と浄土教との関係を検討する。

最後に、檀王法林寺本を描いた絵仏師について検討する。南山士雲と間接的な繋がりを持ち、且つ臨濟宗東福寺派の画僧である良詮<sup>りやうせん</sup>と、十四世紀に活躍した中央絵師のうち詫磨派<sup>たぐ</sup>の長賀と栄賀について、三者の作品を概観する。その上で檀王法林寺本との親近性の検討と制作の可能性を示唆し、本稿の結びとする。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は2部構成となっており、第1部は広島市立大学所蔵「阿弥陀来迎図」、第2部では壇王法林寺所蔵「熊野権現影向図」を論じ、全体では、14世紀の阿弥陀画像の図様・描法の分析をもとに、一典型作とそのバリエーションである特殊な作例を対照させ、当時の、浄土信仰のみならず神仏習合や禅宗も含む複雑な仏教信仰と関わる仏画制作の様相を読み解くことを試みた研究論文である。

第1部では、本学所蔵「阿弥陀来迎図」の精密な科学分析調査に基づく復元模写制作を報告している。顔料や技法のデータ、欠失部復元の推論は、14世紀仏画の典型作の科学的な情報として価値がある。また、それをもとに同時代の特異な作例、「熊野権現影向図」の描法等を推定した。さらに、熊野信仰、禅宗とも関わる制作背景について、本作の先行研究に、宗教史の最新の研究成果を加えた新たな見解を示した。また、同時代の図様上の類似作例に関する指摘は、新知見であり、中世仏画の制作状況に関するきわめて重要な問題を提起するものである。予備審査時の提出論文よりも、文章表現がより厳密な表現になり、参考作品を付加等しており、本論の完成度を更に高めている。

本研究は、中世仏画の手堅い分析・調査から取りかかり、先行研究をふまえて精密に推論を重ねることで、中世仏画史の研究上、意義深い結論を独自に導き出した博士論文として高く評価する。